



ローマ日本文化会館



- 変化していく世界各地の状況にきめ細かく対応した事業活動を展開していくために19カ国に21の海外拠点を開設しています。
- これらの海外拠点は、国際交流の最前線として事業を実施するとともに情報収集・調査等の業務を担っています。
- ここでは、アジア・大洋州、米州、欧州・中東・アフリカ各地域の拠点の活動の代表例をご紹介します。

※ジャパンファウンデーションはこのほか、ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ）、ベルリン日独センター（ドイツ）、カーサ・アジア（スペイン）、韓国国際交流財団、インド文化交流カウンシル等の海外文化交流機関との連携を深めるほか、2007年度には南アフリカ、イラン、韓国、トルコに海外アドバイザーを配置し、現地の文化動向の把握に努めました。



ジャパンファウンデーション海外ネットワーク <http://www.jpff.go.jp/world/jp>にて、海外拠点の活動を紹介しています。

ソウル日本文化センター

2007年度は映画で交流
継続した取り組みも好評

文化芸術交流事業の中では特に映画事業に力を入れました。日本をフォーカスして開催された第11回ソウル国際漫画アニメーションフェスティバルでは新海誠監督や細田守監督を招へいたほか、外部機関との連携を推進すべく、KOTRA(大韓貿易投資振興公社)やシネカノン・コリアと共催で日本映画の上映会を開催しました。また、知的交流分野でも、映画『折り梅』を通じた専門家による日韓両国の高齢者福祉を考えるシンポジウムを開催しました。

そのほか、毎年シリーズで開催しているグラフィックデザイン・ポスター展として「横尾忠則ポスター展」を開催、全州ジャ

パン・ウィーク事業の一環として「和太鼓松村組」の公演も行い地方交流を推進しました。

市民青少年交流分野でも、李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業参加者のOB・OGによる自発的な同期会開催を支援したほか、青少年の就労支援を行う日韓のNPO交流を実施しました。また、韓国に留学している日本語ネイティブ留学生を中学・高校の日本語授業のゲストとして派遣するプログラムも実施しました。

出版分野では、「国際交流基金ポラナビ著作・翻訳賞」を創設し、アニメーション研究家の金俊煥氏に第1回目の著作賞を授賞しました(→11頁)。



第11回ソウル国際漫画アニメーションフェスティバルで来場者にサインをする新海誠監督(奥)とそのスタッフ



『折り梅』上映後のピョン・ヨンジュ監督との討論会で発言する松井久子監督

北京日本文化センター

2007年5月に、北京市東部の中央ビジネス地区(国貿地区)へ移転し、施設を拡充

2007年は、日中両国政府の合意のもとで「日中文化・スポーツ交流年」に指定され、公式に認定事業となったものだけでも両国で300を超すイベントが行われて、交流ムードを盛り上げました。ジャパンファウンデーションでは、特に中国の若い世代に日本の新しい文化を紹介することを意識して、年間を通じてさまざまな活動を展開しました。4月には、日本文化の発信拠点『ふれあいの場』の第一号を中国内陸部の四川省成都市に開設。白一色にまとめられた斬新なデザインの『ふれあいの場』では、最新の日本の雑誌、マンガ、DVDに触れることができます。7月には『J-Meeting Beijing 2007』と題し、アニメ音楽等に関する講演会とアニ

メ歌手(樹海、牧野由依)のライブと交流会を行いました。さらに、9月から1月にかけて、北京、広州の2都市で、日本の現代美術を総合的に紹介する『美麗新世界展』を開催し、のべ7万名の来場者を得ました。



美麗新世界展の展示会場風景



J-Meeting Beijing 2007

一方、2007年度の日本語能力試験の中国での受験者は20万名を超え、当国における日本語学習熱の高まりを示しています。当センターの日本語教育専門家は、北京のみならず中国各地の教育機関を訪問し、研修会やアドバイスをを行いました。



Close Up

所長
藤田 安彦

中国での2007年度の日本語能力試験の受験者は20万名を超え、日本国内を除いた海外の受験者の約半分を占めています。中国は今、日本語学習ブームと言ってもよいでしょう。若者層を中心に日本および日本語への興味が高まっています。一つの背景には中国に展開中の2万社以上といわれる日本企業の存在があります。そこで働く従業員は1千万名以上ともいわれています。当センターでは、日系企業の社会貢献活動の調査・サポートを行う

とともに、企業とのパートナーシップのもとで文化交流活動を行う試みを拡げています。

また、最近、中国でもネット世論が大きな影響力を持っています。そのため広報活動にホームページを活用すると同時に、中国のインターネットメディアにも積極的に情報を発信しています。

北京日本文化センターは、「若者と地方」をキーワードに、人口13億の広大な中国に対し、大平学校・北京日本学研究センター同窓生や日本人留学生のネットワーク「留華ネット」等これまで培ってきた人的関係を大切にしながら、さまざまな機関・団体との連携をさらに深め、新しい日本文化発信事業や交流事業を推進していきます。

東南アジア総局

築いてきた良好な関係をさらに緊密化 東南アジア総局誕生

2007年4月に東南アジア総局がバンコクに設置されました。総局の業務は、東南アジア地域を対象に、①国際交流基金の事業に関する地域のかつ総合的観点からの方針の策定、企画、調整、②関連機関との連携の推進、ネットワー

クの構築、③国際文化交流の動向に関する情報収集、調査分析、を行うことです。

初年度は、基金の対東南アジア事業推進の指針「日本・東南アジア交流5カ年計画」の原案作成を行いました。また、シンガポール・クリエイティブ・センター立ち上げ調査や、東アジア研究ネットワーク (NEAS) の国際ワークショップ (バンコク、3月) 開催準備に協力したほか、周辺国の調査を行いました。

バンコク日本文化センター

日タイ修好120周年記念行事が 目白押し

2007年は、日タイ修好120周年。オペラシアター・こんにゃく座『ピノキオ』のバンコク、タイ東北3都市とラオスでの巡演、JCDC『踊りに行くぜ!』や沢井箏曲院の公演等、記念事業を数多く実施しました。1月には日本映画祭を8日間開催、1950～60年代の名作10本を上映。

タイの日本語学習者は、7万名。うち3万名が中等教育、2万名が大学 (高等教育) の学生たちです。センターでは教師向け研修・セミナーや教材開発等の支援事業を展開。10カ月の教員養成研修 (タイ教育省との共同事業) では、新たに12名の日本語教師が誕生しました。

タイ全国の日本研究者を結ぶ日本研究ネットワーク (JSN) が第1回総会を開催、100名以上が参加。知的交流では、



水俣再生セミナー (会議場風景)

水俣市から元市長ら3名を招き、環境汚染の苦難をのりこえ国際環境モデル都市を目指す水俣市再生の取り組みを紹介、環境問題が深刻化するタイの関係者の反響をよびました。

ベトナム日本文化交流センター



勝恵美写真展

ハノイ市に新事業拠点オープン

2008年3月10日、日越外交関係樹立35周年記念事業の最初の事業として、ベトナム日本文化交流センターのオープニング式典が開催され、日越の政府関係者、著名な文化人、研究者、教育関係者、メディア関係者等が出席しました。式典には、ベトナム側よりグエン・ティエン・ニャン副首相兼教育訓練大臣、ホアン・トアン・アイン文化スポーツ観光大臣が参加する等、ベトナム側がその関心の強さを示し、両大臣から日越関係を政治・経済のみならず、文化の面での交流を発展させたいとの意思が表明されました。式典では、

日本から参加した峰岸一水氏とタイン・タム氏の日越プロの演奏家による一弦琴演奏が行われました。

日本語教育への支援を中心としつつ、日本とベトナムの相互理解推進のため、事業を展開していきます。



ベトナム日本文化交流センター外観

ジャカルタ日本文化センター

古来より伝わる日本の伝統と現代日本をバランスよく紹介

『ピノキオ』（こんにやく座）、『踊りに行くぜ!!』（JCDN）、ジャズピアニストの『塩谷哲ジャズグループ』等が、インドネシアのほか東南アジア各国で巡回公演を行いました。また、2008年1月からは日本インドネシア国交樹立50周年が始まり、そのオープニングを飾った津軽三味線のジャカルタおよびマカッサルにおける公演や劇団態変の金満里ソロ公演、歌舞伎舞踊レクチャーデモンストレーションのほか、展示関係でも日本の玩具展、「スピリットを写す」展等、伝統から現代の日本文化を紹介する多種多様な事業が実施されました。

日本語分野では、当国派遣の日本語教育専門家と連携して、現地日本語教師の質の向上を目指し、各種教師向け研修会および勉強会を積極的に支援してきました。また、2003年から5カ年計画で進めてきたインドネシアの中等教

育向け日本語教材『にほんご1』『にほんご2』（2004年新カリキュラム準拠）が2007年6月に完成し、各高校への無償配布を開始しました。



教材『にほんご1』および『にほんご2』

そのほか、日本語学習者の学習意欲向上のため、高校生・大学生向け（社会人を含む）の日本語弁論大会の実施や一般日本語講座（中級・上級）を開講しています。

日本研究分野では、研究者間および研究機関間ネットワーク強化を目指した各種事業に取り組み、日本研究協会(ASJI)との共催で、ワンデーセミナーをジャカルタで実施し、若手日本研究者4名による発表が行われました。また、外交に関するセミナーを開催し、研究者間による興味深いディスカッションが行われました。

クアラルンプール日本文化センター

日本マレーシア友好年を記念し 舞台、展覧会等多彩な事業を実施

日マ障がい者共同制作演劇公演『記憶の森』を皮切りに、『ピノキオ』（こんにやく座）、『三人姉妹』（パパタラフマラ）、『3mmくらいズレてる部屋』（珍しいキノコ舞踊団）、『英語落語公演』（大島希巳江ほか）、日マ両国のプロ、アマチュアフルート奏者による『フルートフェスティバル』、『沖縄舞踊公演』（沖縄文化民間交流協会）、『箏オーケストラコンサート』（沢井箏曲院）、『塩谷哲ジャズグループコンサート』等々、日本マレーシア友好年2007の今年は、数多くのイベントを実施しました。舞台芸術のほかにも、キネティックアーティスト

田中真聡個展『時紡 トキツムギ』、『アジア漫画展』、『日マ児童画展』、日マ両国の写真家による『Counter Photography展』と



日マ友好年2007関連企画
珍しいキノコ舞踊団公演

いった展覧会、毎年恒例となった「日本映画祭」や「日本語弁論大会」、マレー半島を縦断して実施した「和風ワークショップ」等、この年に実施した主催・共催事業は70を超えました。

日本語教育の分野では、教育省に協力して実施している中学校日本語教員養成研修の2期生がコースを修了し、各地の普通中等学校に赴任し、現在1期生とともにインターンとして教育にあたっています。



Close Up

所長
下山 雅也

ほぼ3年間をかけた「態変プロジェクト」が、演劇公演『記憶の森』に結実しました。身体障がい者による身体表現を追求してきた「劇団態変」金満里代表とマレーシアの演劇人との出会いから生まれたこのプロジェクトは、全く演劇の経験のない障がい者自身がこれまでこの国になかった新しい表現を作り上演することを目指し、数々の調査、ワークショップ、稽古を重ね、多くの人々を巻き込む波となって進みました。

公演初日を二日後に控えた日の夜、金さんが高熱を發

して緊急入院した事態を受けてスタッフが集まった場でマレーシア人のスタッフが言いました。「Show must go on! 何があっても公演はやろう」。奇跡的に金さんは公演初日当日に退院し、即劇場に駆けつけて舞台上に登場しました。振り返ると、それまで何度も困難にぶつかった時、例えば、計画通りにことが進まない時、黒子（健常者）の確保に苦しんでいた時、考え方の食い違いで空中分解しそうになった時、その度に私たちは同じ言葉をつぶやいていたように思います。

このプロジェクトに携わった障がい者も健常者も、この経験を生かし、その後それぞれの道歩んでいます。これからも決して安易な道ではないでしょうが。

マニラ事務所

日本語教育の現場を豊かにするため積極的に取り組み

フィリピンではここ数年日本語教育熱が高まり、深刻な日本語教師不足に陥っています。2007年7月に念願の図書室兼日本語教室がオープンし、各種の研修事業を通じて人材育成に取り組んでいます。また日本のポップカルチャーへの関心の高まりを受け、図書室では900冊のマンガを配架する等情報発信拠点を目指しています。

日本語を学ぶ学生を中心に日本文化紹介の裾野を広げるために始まり、すでに恒例となった「日本語フィエスタ」(2008年2月)では、市内のショッピングモールを会場に、日本語スピーチやパフォーマンスのコンテスト、和太鼓公演、さらには日本の駅弁展示やフィリピンの食材を用いた全国弁当

コンテストを実施し、のべ7万名もの入場者がありました。また若年層の日本語教育ニーズの掘り起こしのため、模擬授業や日本文化紹介をパッケージにした日本語高校キャラバンもスタートしました。

マニラ以外の地方では、日本映画祭をセブや中部パナイ島のイロイロ、ミンダナオ島のイリガンで実施。現代陶磁器展を北部山岳地方のバギオや中部ネグロス島のドマゲッティで実施しました。またミンダナオ島の大学生を日本へ招へいしたり、女性モスレム・リーダーによるフォーラムを開催して市民青少年交流への支援も行いました。



日本語高校キャラバン



Close Up

所長
鈴木 勉

フィリピンは約7,000の島からなる島国で、文化・言語の多様なハロハロ(ごちゃまぜ)の国です。文化交流の仕事もマニラのみには偏らないよう、日々全国地図を眺めながら構想しています。特に南部ミンダナオ地方は、先住民族やイスラム教徒、そして国内各地から移住したキリスト教徒との争いが絶えず、開発の遅れもあって内戦やテロに苦しんでいます。しかし“紛争の島”にも平和を愛し、伝統文化を誇りとし、新たな創造を試みている人々が多く住んでいます。そうした人々との交流を大切に、

次の世代に伝えてゆきたいと考えています。

フィリピンは移民大国で、現在人口の約1割、800万名が海外に移住ないしは契約労働者として居住しています。日本にも約20万名の在日フィリピン人がいて、在日外国人としては韓国、中国、ブラジルに次いで4番目です。最近では日比経済連携協定が話題となっており、協定発効後には、2年間で1,000名の看護師や介護士がフィリピンから日本へ行く予定です。日本はいま急激な少子高齢化に直面しています。今後はフィリピン等海外からの移住者を受け入れ、多様性を相互に受け入れる日本独自の多民族社会を作り出してゆくことが求められるでしょう。その意味で文化交流や日本語教育がますます重要な仕事になってゆくと確信しています。

ニューデリー日本文化センター

急速に発展するインドへ精力的に日本を紹介

2007年度は日印交流年で、ニューデリー日本文化センターはインドにおける日本の紹介に精力的に取り組みました。8月には安倍首相の訪印も実現し、それに合わせて日本映画祭を開催しました。10月～12月には「消失点—現代日本美術」展(→10頁)をデリー並びにムンバイで行うとともに、桂歌丸師匠による落語公演、俳句講演、ソプラノ歌手の公演、沢井箏曲院による琴公演、津軽三味線邦楽公演等の催しを連続して実施することにより、インドの市民から広く好評を得ました。

日本語教育の分野では、インド中等教育課程の日本語科目について、カリキュラム・テキスト制作、教師養成についての支援を行いました。また、民間の学校や高等教育機関、

企業内教育を含めたインドにおける日本語の学習者数が増加している現状をふまえ、本年度は、昨年度に続き、日本大使館と協力して5月に『第2回全インド日本語教育連絡調整会議』を開催しました。

またジャパンファウンダー「消失点—現代日本美術」展開会式

シオンは日本語教育アドバイザー3名を配置し、インドにおける日本語教育をサポートしています。日本研究・知的交流の分野では、ネルー大学、デリー大学に対してそれぞれ客員教授派遣、図書拡充、修士訪日研修を実施するとともに、10月の文学会議に対しても支援を行う等、日印間の知的交流を促しました。



「消失点—現代日本美術」展開会式

シドニー日本文化センター

日豪交流年で得たモメンタムを活かし
幅広く事業を展開

日本映画祭は、シドニーでも人気が定着。メジャー作品からインディペンデント系まで19作品を上映、観客動員数は6,600名に上りました。そのほか、人間国宝・福田喜重氏による「刺繍」の展示・講演会、「飾り巻き寿司」のデモンストレーション、日豪交流の将来を担う若手・新人アーティストを支援する公募企画展『Facetnate!』の立ち上げ等、伝統文化から現代アートまで多様なアプローチで日本文化紹介を行っています。

日本語教育分野では、NSW州立美術館と共同で製作を進めてきた、同館所蔵の仏像や絵巻物等の美術品を題材と



日本語教師向けの研修会

した中等教育向けの日本語副教材が完成。また遠隔地に住む日本語教師でも参加できるオンライン日本語講座の第3段階を開発・公開したほか、日本語教師向けの研修会の実施や日本語弁論大会の開催等を通じて、日本語教育を支援しています。

さらに、オーストラリア日本研究学会の総会等の国際会議やシンポジウムの機を捉えて、基調講演者の招へい等の協力・助成を行い、オーストラリアにおける日本研究の促進と日豪の研究者のネットワーク形成を支援しました。

トロント日本文化センター

カナダと日本、お互いを見つめる視点を
さまざまな芸術活動を通じて紹介

日本の寒村に滞在し、集落の人々へのインタビューを通じて肖像画を描く活動を行ったカナダ人アーティストヴィヴィアン・リース氏による作品や人々との交流を綴った記録を紹介する展覧会を開催しました。また、「武道の精神」展の開催に併せて、剣術に魅せられたカナダ人作家キャサリン・ゴヴィエ氏が宮本武蔵終焉の地を訪ね、その旅を通して見た武蔵の人生とその人物像について語る講演会を開催しました。一方、カナダ在住の日本人アーティスト武谷大介氏による、カナダと日本の「空」と都市を遠方から見ることで、カナダと日本の大都市で見出される普遍性とそれぞれの都市の特徴を表現する作品展『空 / kara』展を開催しました。

このように、カナダと日本の双方を見つめるさまざまな芸術活動の紹介を行い、多くのカナダ市民や芸術関係者から好評を得ました。

また、カナダ国内各地で行われる各種芸術



ヴィヴィアン・リース氏の展覧会とコンサート

イベントや映画祭等を共催・助成し、地域に根ざした地元の事業で日本文化の多様な側面を紹介しました。日本語教育の分野では、近年の調査でカナダにおいて日本語学習の機会や学習者の増加が見られており、日本語教育アドバイザーをアルバータ州に派遣する等、カナダ全体の日本語学習機会および学習者の増加と支援に貢献しています。



Close Up

所長
鈴木 雅之

2007年3月に所長として着任したときまず考えたのは、日本の27倍の広大な国土を持つカナダに対して、限られたマンパワー・財源の中、どうすれば最も効果的かつ効率的に文化交流事業を実施していくことができるのか、ということです。ひとつは、トロント事務所開設以来17年にわたり培ってきた日加双方のネットワークをあらためて活かしていく、ということ。また、トロント市の文化的地区にある当センター施設を最大限に活用すること。さらに、スタッフに蓄積された経験と知識を活かした事

業を行うこと。こうしたことを念頭におきつつ、センターの新たな可能性を探っていきたいと考えています。

2007年度には、トロント市主催の大型文化事業『Doors Open Toronto』(5月)や『Nuit Blanche』(9月)に参加したり、アルバータ州のテレビ局を通じて日本語教材『エリンが挑戦! にほんごできます。』を放映したり、モンリオール大学が中心となって早稲田大学ほかと一緒に実施した「モノリス」というインターネットを利用した知的交流事業をサポートする等、新たな取り組みを行いました。また、各種講演会等のきめ細かなイベントを実施することで当センターの利用者層の拡大を図りつつ、カナダ各都市(オタワ、モンリオール、バンクーバー、カルガリー等)の文化交流事業をサポートしました。

ニューヨーク事務所

都市部向け、地方向けと、現状にあわせた企画好評

日本の現代文学の魅力を全米各地の幅広い人々に紹介する目的で、作家の角田光代氏を招へいし、ニューヨークおよびシアトルにて講演・朗読会を実施しました。会場となった各地の大学、書店、読書クラブでは、参加者との間で活発な意見交換が行われました。また、日本文化に触れる機会の少ない地方向けには、中西部7大学巡回映画上映会を実施、各地で好評を博しました。

公演については、Performing Arts Japan(舞台芸術紹介日米共同事業)の事務局として、文楽全米5都市ツアー等6件の巡回公演、笠井勲氏と若手アメリカ人舞踊家とのコラボレーション『Butoh America』等10件の共同創作を支援しました。また、在米日本専門家中南米派遣事業の一環として、米国で活躍する3公演団を含む4つのグループを8カ国12



加藤幸子氏、吉岡愛理氏ブラジル・ペレン公演

都市に派遣しました。

さらに、日本研究米国諮問委員会の事務局業務を担ったほか、米国アジア学会年次総会等国際会議・シンポジウムの機を捉え、日本研究者のネットワーク形成を積極的に支援しました。

ロサンゼルス事務所

観客動員数に顕れた事業成功の大きさ

北米最大の日系人祭り「二世週祭」において、初めて披露された「青森ねぶた祭り」を支援。1万5千名の観衆を集めたこの事業は文化事業だけでなく、日本人と日系人との交流事業としても大きな成功を収める事ができました。秋には全米5都市10公演の文楽公演ツアーをサポートし、ロサンゼルスでの4公演は合計3,280席が満員となりました。また、「文字レクチャー&デモンストレーション」を米国西部5都市で開催。京都大学阿辻哲次教授が漢字の成り立ちの講演、また日米文化会館小阪博一氏が書道の実演を行い、日本語教育と文化紹介を融合した事業を実現しました。春には映画やテレビ衣裳を手がける着物スタイリスト富田伸

明氏を招き、「着物に関する講演と着付けファッションショー」を3都市6公演行いました。「文字」も「着物」もどちらのイベントもロサンゼルス地元テレビ局で特集放映されました。



日本語教育では日 ロサンゼルスで行われたねぶた祭り
本語教師の夏期研修を実施、またオンラインによる日本語教師養成研修システムを実現するために全米日本語教師会連盟との会合を行いました。



Close Up

所長
菅野 貢輝

ロサンゼルス事務所が管轄する地域は、原則として、ロッキー山脈より西の13州となっています。カリフォルニア州内においては、ほとんど毎週のように太鼓、日本舞踊、盆栽、茶道、武道等草の根レベルでの日本文化紹介関連事業が各地で展開されています。特に、ロサンゼルスでは多数の日系コミュニティの方たち(カリフォルニア州→28万9千名、南カリフォルニア地域→17万8千名)が多様な分野で影響力を持って活躍されていますが、ジャ

パンファウンデーションは「日本文化継承」に強い関心をお持ちのこの方たちの潜在力を大事にし、主催による日本文化紹介事業の際にも、考慮に入れて実施しています。また、当事務所の主幹事業として位置づけられている日本語教育振興支援については、全米を対象にすることを念頭に入れながら仕事をしていますが、この広大な国にきめ細やかに網の目を張ることは、簡単なことではありません。従って常日頃から在米日本館、日本語教師会、日米協会等のご協力を得ながら、可能な限り着実に“複眼的指向”で仕事を行うことに留意しています。この姿勢がとりわけ、学習者層が厚い中等レベルにおける日本語教育の活性化の強固な下支えになることを念じております。

メキシコ事務所

大人から子どもまで 日本の文化にふれる機会を積極的に演出

7月には映画監督今村昌平氏の作品10本の特集上映を国立シネマテークと共催で行い、のべ約3,200名の観客を集めました。また、オルメカ文明に関する遺跡出土品で知られる、ベラクルス州のハラッパ人類学博物館では7月から9月まで伝統陶芸展を開催、日本の優れた伝統美術品をメキシコの地方都市で紹介する貴重な機会を持つことができました。

秋には当地でも著書が出版されている絵本作家の五味太郎氏によるワークショップをメキシコシティとグアダハラ市で実施。同氏の来訪は当地のマスコミからも注目され、参加者の創意を生かしたワークショップは、子どもだけでなく

大人からも好評を得ました。

日本語教育に関しては、メキシコ在住の日本人がボランティアとして日本語の授業に参加して学習者と会話の練習をする「ビジターセッション」を当地の日本語教師会と共同で実施。普段日本人と話せる機会がほとんどない当地の日本語学習者の学習意欲向上に成果をあげました。

このほか、中米地域唯一の海外拠点として、近隣諸国において実施される日本文化紹介事業に協力するため、メキシコ在住の日本文化専門家を派遣する事業も実施しました。



メキシコシティでの五味太郎氏ワークショップ



Close Up

所長
中村 裕二

日本とメキシコとの交流は江戸時代初期に始まると言われています。当時メキシコはスペインの植民地でしたが、1609年にフィリピンとメキシコを結んでいたスペイン船が暴風雨のため千葉県御宿の海岸に座礁。乗り組んでいたメキシコ人らは地元民の救護を受け、徳川幕府は帆船を建造して一行をメキシコに送り返しました。また、1613年に伊達政宗によってローマに派遣された支倉常長の一行は、往復ともにメキシコを経由しました。

その後、日本の鎖国政策により交流は長らく途絶えま

したが、明治維新後の1888年には開国後の日本にとって初めての平等な条約となる日墨修好通商条約が結ばれ、今日まで良好な関係が続いています。アニメやマンガといった日本のポピュラーカルチャーや日本食は、今ではメキシコでも都市部の人々には身近なものとなっています。

2007年はメキシコに日本からの移民が到着してから110周年にあたりました。また、2008年は外交関係樹立120周年、2009年は日本とメキシコの最初の交流(1609年)から400周年にあたります。このように日墨関係において記念すべき年が続くことから、両国関係のさらなる緊密化と交流の拡充を目指して、この数年間はさまざまな文化交流事業を実施していく予定です。

サンパウロ日本文化センター

日本ブラジル交流年 (日本人ブラジル移住百周年) 事業を開始

1908年6月に移民船笠戸丸がサントス港に入港してから100年、2008年は日本ブラジル交流年(日本人ブラジル移住百周年)にあたります。ジャパンファウンデーションでもこの節目の年を記念し、2008年の年明けから各種事業を開始しました。2月から3月にかけては、サンパウロほか計4都市で江戸糸操り人形『結城座』公演およびワークショップを実施。日系人を含むブラジルの多くの人々に日本の伝統文化を再認識してもらうべく、当センターも現地のバックアップに尽力しました。

また、2006年度から継続させてきた『味覚の知恵』連続

講演会企画の一つとして、2007年4月に日本から農学博士の石毛直道氏と伝承料理研究家の奥村彪生氏を招へいしサンパウロほか計3都市でレクチャーデモン



和食のレクチャーデモンstrレーション

レーションを実施。『味覚の知恵』シリーズは2008年3月まで続きました。

そのほか、日本語スピーチコンテストも例年同様大きな盛り上がりを見せました。日本研究・知的交流分野では、京都国際日本文化研究センターの教授陣を招き、日本の笑いの文化をテーマに講演会を実施しました。

ローマ日本文化会館

幅広い分野の日本文化を多角的な観点から企画

ローマ日本文化会館では、日本文化を多面的にバランスよく紹介することを心がけ、2007年度も、さまざまな事業を実施しました。

館内展示では、現代建築展、木版リトグラフ展、クレイワーク展等を開催し、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館出品作家の岡部昌生氏の展覧会も開催しました。映画では、成瀬巳喜男監督特集や、小津安二郎・吉田喜重・北野武監督らの作品上映を実施しました。また、コンサートでは、日本の伝統音楽から、ルネサンス音楽、和太鼓とドラムスのデュオにいたるまで、多彩なジャンルを取り上げました。

外部との協力事業も積極的に行い、オーストリア文化会

館との共催による現代音楽コンサートや、日本人ピアニストと国立アカデミー管弦楽団首席クラリネット奏者等とのコンサ



ヒダじんぼのコンサート(ヒダノ修一氏と神保彰氏のユニット)©Mario BOCCIA

にも開催しています。さらに、イタリア各地での日本への関心の高まりを受け、地方での事業実施・支援にも力を入れ、ボローニャでの狂言公演等を行いました。

日本語教育については、当館日本語講座において、社会人向けに夜間や土曜日のコースも引き続き開講し、幅広い日本語学習のニーズに応えるとともに、イタリア各地での日本語教育を支援するため、教授法セミナー等を実施しました。

ケルン日本文化会館

あらゆる手段で現代の日本を紹介 他機関との連携も積極的

現代日本文化の紹介を軸として、展覧会、音楽会、映画会、講演会のほかに日本語の普及にも力を入れています。ドイツと日本の若手アーティストを紹介する当館の「対話展」は既に長い歴史を持っていますが、2007年は「佐藤・Schellhorn」展と「鈴木・Schniotalla」展を開催しました。前者はベルリン日独センターにも巡回する等、対話展としては初めての国内巡回を行い好評を博しました。そのほか、若手建築家藤本壮介氏の講演会を開催、文化人招へい事業で日本に招へいされたNWF州立美術館キュレーター、ドリス・クリストフ氏による日本美術の先端を紹介する講演会を開催し、「日本の今」を紹介するように努めています。

このほか、作家辻仁成氏巡回講演会(ベルリン、ミュンヘン)、マンハイム大学で実施された「日本語通訳セミナー」への協力、デュッセルドルフ大学で実施した『日本のディアスポラ』、



荻原俊 辻仁成氏「太陽待ち」朗読会 ©上野潤宏教授による講演会『9.11後の日本社会』等、他機関との連携による知的交流事業にも力を入れています。このほか、ケルン市との協力事業にも積極的に参加しています。

舞台芸術の分野では『ヒダじんぼ』『上々颱風』といったポップスから『時間の音』等日本やドイツの現代音楽のコンサートまで、幅広く紹介しました。毎年注目される「北野武」「金井勝」監督特集上映等の映画会には数多くの映画ファンが集いました。



Close Up

館長
上田 浩二

はじめてドイツに留学した頃、ケルンに日本文化会館ができたことを知りました。それから数十年、その会館の責任者をお引き受けしています。実際に着任してみると、なによりも「過渡期」であることを強く意識させられます。

本部からの予算を使って会館内で催しを行うスタイルからの脱却、芸術分野だけでなくシンポジウム等の知的交流にいたる多様な事業の展開等、新たな可能性を探る毎日です。また、日本と同じくらい広いドイツ(さらにスイス)をカバーするため、限られた予算の中で今なにか

能なのか問われています。ドイツ統一でベルリンに首都が移転した結果、ケルンは首都から遠く離れた唯一の文化会館となりました。旧東独地域では日本情報がまだまだ少ないので、遠隔地ケルンからどう対処していくかも大きな課題です。

さらに、ドイツのような先進国における文化事業とは何か、世代ごとに大きく異なる日本観を事業の中でどこまで考慮に入れるか、異文化交流の研究をしてきた私にとっては、考える材料がいくらかもあって刺激的です。「過渡期はやりがいがある」と信じて、日本に関心のあるドイツの方々、館員の皆さんとともに前向きに進んでいきたいと思っています。

パリ日本文化会館

開館十周年事業に大きな反響

2007年度の展覧会は開館十周年事業として前年度開幕した「棟方志功」展に始まり、日欧交流に重点を絞って本部主催展「アジアのキュビズム」展および3年掛かりの企画「黒田清輝から藤田嗣治まで〜パリに学んだ洋画家たち〜」展を開催し、大反響を呼びました。

舞台では現代若者を表象する劇団チェルフィッチュ『三月の5日間』上演、前衛ジャズ「渋谷知らズオーケストラ」、大駱駝艦舞踏公演、十周年を飾る金剛流宇高会能公演、江戸糸操り人形座『牡丹燈籠』、劇団燐光群『屋根裏』上演、米国で活躍する亀吉敏子ジャズコンサート、そして会館初の文楽本公演と、伝統と前衛を交互に事業展開しました。映画事業では、海外で最大規模の「鈴木清順特集」と、映

画史を掘り下げるシリーズ新企画第1弾「日活の歴史」を開催しました。

また講演会では、日本食ブームに呼応して料理人・小山裕久氏による日本料理デモンストレーションおよび講演を初め、食文化講習会を何度も実施したほか、日本語教育支援事業や日本研究・知的交流事業にも力を入れ、後者では十周年記念で「日本語教育政策のニューアプローチ」と題した国際シンポジウムを開催する等、日本のソフトパワーを巡って熱い議論が交わされる機会を設けました。



「黒田清輝から藤田嗣治まで〜パリに学んだ洋画家たち〜」展：黒田清輝「婦人像(厨房)」東京藝術大学所蔵



Close Up

館長
中川 正輝

「パリ日本文化会館設立の企画は賭けであった。というのも、当時多くの難関を克服せねばならなかったからである。しかし10年を経て、今やパリの町並みにすっかり溶け込んだこの館の成功は、パリの一般市民が最も良く知るところである」

これは開館十周年を記念して、シラク前フランス大統領から頂いたメッセージの冒頭要約です。日々さまざまな文化的催しが身近にあるこのパリにおいて、一外国の文化会館が注目を浴びるには多くの努力と知恵が要求さ

れます。パリ日本文化会館は単なる博物館でも劇場でもない、いわば日本の文化の多様性を示すことを念頭に置いて企画を練り、人々の目に触れさせたことが成功の要因であると言えます。その多様性も、従来の展示、舞台公演、映画上映、講演会、図書館の5つの柱に加え、日本語の教育支援事業が軌道に乗り、文化としての日本料理の啓蒙企画が新たに加わったのが2007年度の特徴です。もう一つ特記すべきは、官民合同プロジェクトとして誕生した当館ゆえに、十周年を契機に経済界からの理解が一層深まり、特定企画に対しCSRの観点よりご支援を頂くケースが増えてきたこと。事業予算が厳しくなる昨今、誠に嬉しい兆しです。

ブタペスト事務所

日本・ハンガリー協力フォーラム特別事業開始

2004年10月の日本、ハンガリー両首相の合意に基づき、日本とハンガリーの交流を拡大する目的で有識者会合『日本・ハンガリー協力フォーラム』が設置されましたが、ハンガリーにおける日本語教育の維持、発展のために、協力フォーラムのイニシアティブで2007年度から6年間の予定で特別事業がスタートしました。

この特別事業は、複数の日本の有力企業からの寄付金を元に、現地日本語教師雇用のための支援、教師研修、教材開発等の包括的な日本語教育支援を行うものです。初年度となる2007年度は、中等教育、成人講座等4機関に教師雇用支援を実施したほか、6回の教師研修会を実施、

日本語教材作成のアウトラインを決定しました。

このほか主な事務所の活動では、事務所スペースを使っでの文化講演会を年5回、市内映画館を借りての劇映画を19回、地方都市での写真パネル展等を6回行い、事務所の日本語講座においても8コースを運営し120名近い生徒が勉強をしました。

日本語教師向けの研修会



ロンドン事務所

映画祭等、多彩なプロジェクトを実施
企業対象の調査等の新しい試みも

2007年度は、巡回展「新世代アーティスト展」や平田オリザ脚本「東京ノート」のドラマリーディング、巡回日本映画祭「A Life More Ordinary」等、現代日本文化のさまざまな姿を紹介する事業を中心に数々のプロジェクトを実施したほか、日本映画連続講座「Japanese Cinema for Busy People」を通じて日本映画を俯瞰する機会を提供しました。

日本語教育分野では、前年度に開発・作成した中等教育修了試験対応リソース『カー-CHIKARA-』を教材にした日本語教師研修会をシリーズ化して開催する一方、上級学習者を対象に、映画や短編小説を通じて日本語を学ぶ

Talking Contemporary Japan 講座を開講し、日本語教師と学習者双方にバランスよく目配りした事業展開を心がけました。

また新たな取り組みとしては、在英の日本文化専門家の中東地域派遣や、事業開発戦略室とともに在英日系企業を対象としたCSR活動状況調査を実施しました。



映画祭チラシ：映画に見る“普通”の日本人!?



『東京ノート』ドラマリーディング

カイロ事務所

参加型の事業
きめ細やかなサポートで文化の架け橋に

日本の伝統文化である和紙・凧・書道・工芸等の展示会やワークショップ、レクチャーデモンストレーションを実施し、日本の生活文化を紹介する一方、主に若者層を対象にアニメーション映画上映、日本ドラマテレビ放映、電子音楽を融合させたトランペットコンサート等の現代の日本文化の紹介も実施しました。特に「凧ワークショップ」では、日本から専門家大橋栄二氏を迎え、凧作りワークショップのみならず、ギザの大ピラミッドにてエジプトと日本の子ども達の凧揚げ大会を実施し、ピラミッドの空に連凧が揚がり、文字通り両国の架け橋となりました。

日本語教育事業では、カイロ事務所が運営するカイロおよびアレキサンドリアでの一般向け日本語講座の人气が高く、初級を中心に上級コースまで年間のべ約600名の学習者を受け入れました。また、中東地域の教師を対象として実施した「中東日本語教育セミナー」には57名の日本語教師が参加し、中東の日本語教師ネットワークの維持、レベルアップのサポートにもなりました。



ピラミッドを背景に凧が舞う



Close Up

所長
福田 和弘

日本から遠く離れた当地において、日本についての情報は限られていますが、事務所のホームページや機関誌でのアラビア語での情報発信をはじめとして、インタラクティブな事業を通じてエジプトの人達が日本文化を体験する機会を増やし、日本ファンの拡大に努めていきたいと思っています。

エジプトは欧米の影響が強く、広く一般の人々に日本に興味を持ってもらうことは簡単なことではありませんが、街を見ると、人口の約65%を占める若者達(29歳以下)で溢れており、その若者層をターゲットの中心にすえた

交流を実施していきたいと思っています。

近年では、観光産業以外にもマンガ等ポップカルチャーへの関心から日本語学習を始める人も増えているようです。昨年、アレキサンドリアの日本語講座の学習者募集に対し約200名もの希望者があったことから、学生や社会人を中心に絶対数は多くはありませんが、日本に関心を持つ人々が近年増加していると実感します。

また、最近ではカイロの街中でも日本食(SUSHIが中心)をメニューに出すレストランが少しずつ増えはじめ、若者達がトレンドリーな感覚でSUSHIをつまんでいます。こうして、エジプト人の日常の中に、少しずつ日本文化が入り込んでいるようです。そういう流れを大切にしながら、これからもエジプトにおける日本文化のオアシスとなるよう努めていきたいと考えています。